

ポスター発表 1

タイ社会が抱く日本とタイのダブルのイメージに関する一考察
—日タイダブルとして成長した当事者の語りから—

松岡里奈 (大阪大学大学院生)

本発表は、社会のイメージがダブルの子どもたちに与える影響を探ることを目的に、日本に対して肯定的な印象を持つタイ社会(外務省, 2013「ASEAN 7カ国における対日世論調査」)が抱く、日本とタイのダブルへのイメージを、当事者はどのように捉えているのか、当事者の語りを通して考察を試みるもので、本研究は国内外の日本/外国にルーツを持つ若者の実態がより把握できる点で意義があると考えている。

鈴木(2004)では居住国によるダブルの子どもたちの住み心地の差が指摘されている。日本においては、Uchio(2015)がフィリピンルーツの若者が社会からの偏見に対処している様子に注目し、トムソン木下(2013)ではオーストラリアにおいて、日本ルーツの若者が肯定的なアイデンティティを培っている様子が観察されている。ではタイに生きる日タイダブルはどうだろうか。

調査は、日タイダブルとして成長した若者(当時 20~23 歳)5名にライフストーリーインタビュー(第1回)と半構造化インタビュー(第2回)を行い、文字化したデータと、フォローアップで使用したLINEメッセージを分析の対象とする。分析にあたり、タイ社会が日タイダブルへ抱くイメージに関する語りを抽出し、相互に比較した。

その結果、ある若者はタイ社会において日タイダブルは肯定的に捉えられていると語ったが、ある若者は「日本はちょっと弱そうな感じだからいじめやすい」(語りママ)と否定的に語った。後者の若者は学齢期に日本とのダブルであることを他者に揶揄された経験があったことが語りから分かった。つまり、居住国の社会が日本に対して抱いているイメージが肯定的かどうかに関わらず、学齢期における他者との関わりの中での経験が、当事者が考える、社会が抱くイメージに影響を与えており、さらにはそれが将来設計にも影響している可能性も見られた。